『夏目漱石を読むという虚栄』要点

1　自分語としての夏目語

十年ほど前から偽情報対策が求められるようになったが、その前にやるべきことがある。それは、〈その情報に意味があるか？〉と点検することだ。真偽を確かめることができるのは、意味がある情報だけだ。意味不明の情報の真偽など、どうにもならない。

ただし、こんな話をしても、通じないのかもしれない。なぜなら、日本人の大半が意味と価値を混同しているようだからだ。

〈そんなことをやっても意味がない〉というときの〈意味〉の意味は〈価値〉だろう。

私の用いる〈意味〉の意味は〈意味〉だ。

確かな意味はないが価値のありそうな文言を〈ポエム〉と呼んで蔑む。

価値はないが意味のありそうな文言を〈屁理屈〉と呼んで避ける。〈漱石枕流〉ともいう。

負け惜しみが強く、自分の誤りに屁理屈（へりくつ）をこねて言い逃れることのたとえ。漱石枕流（そうせきちんりゅう）。

語源「石に枕し流れに漱ぐ（=俗世間を離れて山林などで自由に暮らす。枕石漱流）」というべきところを逆に言ってからかわれた晋の孫楚（そんそ）が、「流れに枕するのは耳を洗うためで、石に漱ぐのは歯を磨くためである」とすかさず言い返したという『晋書』の故事に基づく。

（『明鏡国語辞典』「石に漱（くちすす）ぎ流れに枕（まくら）す」）

夏目金之助が〈漱石〉と名乗ったのは自戒のためと考えられなくもないが、自戒の演技かもしれない。自戒の演技も「負け惜しみ」の一種だ。

「漱石枕流」に似た言葉で、〈ご飯論法〉というのがある。〈ご飯〉の意味を〈食事 or 米食〉と、二つの意味で用いる。〈ご飯を食べなかった〉と言いながら、食事をしたことがばれたら、〈パンは食べた〉などと言い逃れる。そんな〈論法〉だ。

自分勝手にいろんな意味で使う語句を〈自分語〉と呼ぶことにする。自分の意見が論破されそうになったら、意味を変えて逃げるためのトリックだ。〈ご飯論法〉の〈ご飯〉は自分語だ。夏目の自分語を〈夏目語〉と書く。

こうした矛盾めいた欺瞞の文体は、古代から用いられている。

（楚の国に矛と盾とを売る者がいて、自分の矛はどんな盾をも破ることができ、自分の盾はどんな矛をも防ぐことができると誇っていたが、人に「お前の矛でお前の盾を突いたらどうか」といわれ、答えられなかったという故事に基づく）

（『広辞苑』「矛盾」）

中国では、矛盾したことを言ったら、恥を掻く。
日本では、どうか。

私はこういう矛盾な人間なのです。或(あるい)は私の脳髄よりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかもしれません。

（夏目漱石『こころ』「下　先生の遺書」一）

日本人は、「こういう」がどういうであれ、〈「矛盾な人間」といった自己紹介ができる人は謙虚だ〉と思うのかもしれない。あるいは、〈人間の本質は「矛盾な人間」である〉などと独り合点するのかもしれない。〈孫楚の気持ちを忖度してやれよ〉なんてことを言い出すかもしれない。〈言語の本質は「漱石枕流」である〉と言い出すかもしれない。

「或(あるい)は」は〈ひょっとすると〉と解釈する。〈「脳髄」or「過去」〉なんて、見せかけの二者択一だ。選択肢は他にも考えられる。たとえば、漱石枕流型の「矛盾な」文体のせいだ。

ある日、テレビに出ていた人が〈忖度という美しい日本の文化は失われてしまったんでしょうかねえ？〉と呟いた、淋しげな表情を拵えて。

気取り過ぎたと云っても、虚栄心が祟(たた)ったと云っても同じでしょうが、私のいう気取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

（夏目漱石『こころ』「下　先生と遺書」三十一）

皆さんには、「先生」のいう「意味」が通じますか？　通じない人、手を挙げて下さい。は～い。手を挙げた人、美しい日本から出て行って下さい。
（～１４２０　作家ファーストで何四天王）

２　漱石構文

近頃、〈○○構文〉という言葉がはやっている。詳しいことは知らないが、この〈構文〉という言葉の用い方は、不適切だろう。この言葉は、〈構文としてはできているが、意味不明の文〉という意味らしい。ただし、この言葉を用いる人は、不適切ということを承知のうえで用いているようだ。面白半分だろう。だったら、私も、面白半分で使っていいかな。

私が不愉快なのは、〈○○構文〉と呼ばれるような意味不明の作文だけではない。そういう意味不明の作文を有難がる人々のことが不愉快なのだ。もっと言えば、意味不明の作文を〈○○構文〉と揶揄しただけで勝った気になり、その文を壊さないで済ます人がいることだ。

壊すとは、分析、解説、注釈、言い換え、書き換えなどの作業をやってみることだ。そうした作業を怠けているのなら、〈〇〇構文〉という言葉そのものが〈〇〇構文〉の一種になってしまう。

こうした例は他にもある。たとえば、ある情報を陰謀論と決めつける意見も、別種の陰謀論かもしれない。

夏目の文体は〈漱石構文〉と呼べる。彼は意味不明の文を量産した。冗談のようだが、冗談だとしても、どこがどう面白いのか、私にはわからない。誰にわかるのだろう。逆説めいているが、逆説だとしたら失敗だろう。比喩が比喩として成り立たない。切羽詰ると造語に逃げる。とにかく、ごまかしや言い逃れみたいなことを頻繁にやっている。

「私は丁度独乙(ドイツ)が聯合軍(れんごうぐん)と戦争をしているように、病気と戦争をしているのです。今こうやって貴方(あなた)と対坐していられるのは、天下が太平になったからではないので、塹壕(ざんごう)の中(うち)に這入(はい)って、病気と睨(にら)めっくらをしているからです。私の身体は乱世です。何時どんな変が起らないとも限りません」

（夏目漱石『硝子戸の中』三十）

夏目は「独乙(ドイツ)」か、「聯合軍(れんごうぐん)」か？　「戦争」は「睨(にら)めっくら」か？　彼の「病気」は「身体」のみか？　「戦争」は「病気」の比喩だろうから、「病気と戦争をして」は無意味。〈戦争が戦争をして〉いるのか。

私は私の病気が継続であるという事に気が付いた時、欧洲の戦争も恐らく何時の世からかの継続だろうと考えた。けれども、それが何処からどう始まって、どう曲折して行くのかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉を解しない一般の人を、私は却って羨(うらや)ましく思っている。

（夏目漱石『硝子戸の中』三十）

「無知識なので」から「継続という言葉」へは繋がらない。

こんな嫌味な作文を目にすると、私はいらつく。

ところが、うっとりする人がいるらしい。〈自分には、自分だけには、「継続」の意味が理解できそうだ〉と、自分で自分を騙してしまうのだろう。やがて、ずっと前から知っていたような気がしてきて、さらに、そんな気分が「継続」して、やがてその人自身までが「病気」になっちゃうのかもしれない。

こういう人のことを、私は〈夏目宗徒〉と呼んで、警戒する。彼らは漱石文豪伝説の信者だが、大半の信者はうっとりしない。ただ漫然と伝説を信じているだけだ。夏目宗徒は知ったかぶりを披露する。

さて、ここで、夏目は嘘を書いている。「私の病気が継続であるという事に気が付いた」

という話なんか、この前にはないのだ。

　ある日Ｔ君が来たから、この話をして、癒ったとも云えず、癒らないとも云えず、何と答えて好いか分らないと語ったら、Ｔ君はすぐにこんな返事をした。

「そりゃ癒ったとは云われませんね。そう時々再発する様じゃ、まあ故(もと)の病気の継続なんでしょう」

　この継続という言葉を聞いた時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以後は、「どうにかこうにか生きています」という挨拶を已めて、「病気はまだ継続中です」と改めた。そうしてその継続の意味を説明するために、必ず欧洲の大乱を引き合いに出した。

（夏目漱石『硝子戸の中』三十）

「教えられたような気」というのは怪しい。「Ｔ君」ではない誰かに「教えられた」ことになるからだ。つまり、夏目の頭の中に誰かがいて、その誰かが彼に教えたわけだが、その誰かが話に登場しない。彼はこの誰かの正体を隠したがっている。隠すために、「欧洲の大乱」を煙幕として用いたのだ。

実在しない誰かを〈Ｄ〉と呼ぶ。〈dareka〉の略記だ。Ｄは誰の頭の中にもいるはずだ。たとえば、〈良心〉や〈悪魔〉などと呼ばれる。自問自答とはＤとの対話だ。夏目は、このＤの正体を明かさない。「Ｔ君」みたいに頭の外に実在したみたいな印象がある。Ｄの声が外から聞こえるようになったら、妄想だ。

「継続」という言葉を用いることによって、夏目は「病気」の本当の原因を反省しないで済むことに気づき、喜んだ。だが、自己満足はできない。だから、「その継続の意味」を誰かに語りたくなる。自分を騙す代りに他人を騙して安心しようと頑張るわけだ。相手が騙されてくれないと、こうした嫌味な、脅しみたいな随筆を書いてスカッとしようとする。だが、やはり、自己満足はできない。たとえ、騙されてくれる人がいたとしても同じだろう。自分で自分を騙しきれないから、不安や不満は「継続」する。つまり、「脳髄」が「病気」になる。そして、そのせいで「身体」を痛め、また、そのせいで、「脳髄」が「病気」になる。悪循環だ。

　所詮(しょせん)我々は自分で夢の間(ま)に製造した爆裂弾を、思い思いに抱(いだ)きながら、一人残らず、死という遠い所へ、談笑しつつ歩いて行くのではなかろうか。唯どんなものを抱(だ)いているのか、他(ひと)も知らず自分も知らないので、仕合せなんだろう。

（夏目漱石『硝子戸の中』三十）

「爆裂弾」は唐突。戦争は無駄な自爆か？　「死という遠い所」は意味不明。〈あの世が「遠い所」にあるように死期も遠い〉と思いたいのだろうか。自己欺瞞が不徹底なので意味

不明の文になったわけだ。「どんなもの」かは、大した問題ではない。「抱」に「いだ」と振っておきながら「だ」に変えるような姑息な手法が「爆裂弾」を拵えてしまうのだ。

「抱（いだ）く」は、夢、希望、不安、恐れなどの感情を持つ場合にも用いる。

（「類語例解辞典」109－38）

「一人残らず」「仕合せ」なら、夏目も「仕合せ」なんだよね。違うの？　どうして？　整理しよう。

１〈私は「どうにかこうにか生きています」〉
２〈私は「継続という言葉を聞いた」〉
３〈「私は好い事を教えられた」〉
４〈「私は私の病気が継続であるという事に気が付いた」」
５〈「我々は自分で夢の間（ま）に製造した爆裂弾を」（後略）〉
６〈「欧洲の戦争も恐らく何時の世からかの継続だろう」〉
７〈私の「病気はまだ継続中です」〉

これらの物語は、普通の意味では「継続」していない。４から５は、完全に飛躍。〈「私」の物語〉が、何の断りもなく、〈「我々」の物語〉に変っている。５から６へは、飛躍ですらない。無関係。だから、「病気」の比喩として「戦争」は成り立たない。

隠蔽された物語は、次のようなものと推測される。

〈私の「病気」が完治しない理由について、「他（ひと）も知らず自分も知らない」ままでいることが望ましい〉

夏目は、語句にすがるようにして物語を捏造する。物語を完成させるために語句を選ぶのではない。語彙の過剰は混乱を招く。創作の役に立たない。むしろ邪魔。

夏目は妄想を語っているのではない。妄想的、あるいは呪術的に語り続けるならば、〈胃が痛む日は欧州で戦闘が起きている〉などと語るはずだ。さらには、〈自分が治癒すれば欧洲は平和になる〉などと語るはずだ。ただし、この場合、「欧洲の戦争も恐らく何時の世からかの継続だろうと考えた。けれども、それが何処からどう始まって、どう曲折して行くのかの問題になると全く無知識」というのは嘘になる。

夏目の作文は、しばしば、筋が通らない。そもそも、筋を通す気がないらしい。理屈っぽいが、筋の通らない〈ポエム〉だ。

夏目の嫌味な語り口に圧倒されて、〈意味不明〉と自白するのが恥ずかしくて、怖くて、知ったかぶりをするために〈漱石文豪伝説〉をでっち上げてきたのが、夏目宗徒だ。類は友

を呼び、賢ぶりたい連中が〈伝説〉を補填したり拡散したりしてきたのだろう。〈伝説〉を常識のように信じてしまったのが信者だ。日本人のほとんどは信者だろう。夏目の作品を読んだことのない人でさえ信者だ。何を隠そう、私も信者だった、小学生の頃。

物語が素朴であれば、言葉数が多くても邪魔にならない。冗長になるだけだ。しかし、本心を隠蔽したまま、物語の雰囲気だけを伝えようとすると、言葉の数だけ、次々に物語が誕生してしまう。しかも、どの物語も完結しないまま、放置されることになる。夏目のすべての小説には、まっとうな結末がない。

夏目は欺瞞のために〈漱石構文〉を採用する。そのせいで、場面の羅列のようになる。一貫性を欠く。だから、「継続中」という言葉が有難かったのだろう。この言葉は彼自身の〈「私」の物語〉の一貫性の欠如を隠蔽できるからだ。

夏目は、不安について反省をしたくなくて、〈漱石構文〉を利用して自己欺瞞を続けながら、〈「身体」の「乱世」〉に依存していたのだ。彼は「病気」を必要としていた。

随筆だろうが創作だろうが、夏目の文章には確かな意味がない。朦朧としている。彼は自分が何を書いているのか、よく理解できていなかったようだ。だからといって、彼の作文が〈人間には確かな表現ができない〉といったような実験的な表現として成立しているわけではない。要するに、支離滅裂なのだ。

（～２５４０　「継続中」の「精神」）

３　〈文豪伝説〉の作者

夏目は〈文豪伝説〉の主人公である漱石になりたくて小説を書いていたようだ。

ところで夏目漱石として知られる小説家は、漱石的「作品」に自分をなぞらえることのできたほとんど例外的な存在であり、それ故にこそ「作家」と呼ばるるにふさわしい人間なのだ。この際、たまたま彼が夏目漱石の名で幾篇かの小説を書いていたという事実は、ほとんど無視するにたる些細な条件にすぎない。だから、文学的な贖罪の物語が漱石によって書かれなかったのは当然というべきだろう。物語は、彼が「作品」を模倣し反復する過程で消費されつくしてしまったのだ。その意味で、夏目漱石は、漱石的「作品」の特権的な読み手だというべきかもしれない。「作品」に似ることができるのは、小説家ではなく、読者だからである。それ故、漱石的「作品」が夏目漱石に似ていないのは、いささかも驚くべきことがらではない。「則天去私」だの「自己本位」だのがほどよく漱石に似ていたというような意味でなら、漱石的「作品」は漱石にほとんど似ていないとすらいえるだろう。だが逆に、夏目漱石は漱石的「作品」に恥しいまでに酷似しているのだ。

（蓮實重彦『夏目漱石論』「終章　漱石的「作品」」）

夏目作品を理解するには、どこにもない夏目の〈自分の物語〉を想像する必要がある。彼の小説は陰画であり、特定できない文豪伝説が陽画なのだ。逆ではない。夏目宗徒は夏目の〈自分の物語〉を捏造するためにその作品を利用する。

蓮實の論は、次の江藤の論を裏返そうとしたものだろう。

> ぼくらは「高慢と偏見」や「マンスフィールド・パーク」を思い浮かべることなしに、ジェイン・オースティンを考えることは出来ない。しかし、「猫」や「それから」や「明暗」は喪章をつけてうなだれた漱石の影にかくされていて、ぼくらは作品より、むしろ明治の時代を生きた代表的な日本の知識人としての彼自身に興味を感ずるのだ。漱石のような大作家をこのようにしか見ることの出来ないのは不幸なことである。しかし、ぼくらと芸術の関係はそれ程不幸なものなのだ。仮りに百年の後に漱石が残るとしても、彼は「草枕」や「坊つちやん」の作家として残るのではさらにない。彼は、作家でもあった文明批評家として残るのであって、偽物でない文学を志す日本人はこのことを肝に銘じておかなければならない。
>
> （江藤淳『決定版　夏目漱石』「第五章　漱石の深淵（しんえん）」）

「作家でもあった」らしい江藤は、〈夏目宗徒ではない「知識人」は「偽物」である〉と宣言するために文豪伝説を利用し、自らも捏造した。「ぼくら」は「不幸」なのだそうだ。しかし、私は、夏目や江藤やその仲間たちの悪文のせいで「不幸」なのだ。

江藤の悪文に比べれば、蓮見の文章は読みやすい。だが、やはり難解だ。気障で、嫌味。彼らのスタイルは「漱石的」と言える。蓮見も江藤の同類なのだ。

（～１４３０　慢語三兄弟）

４　文豪伝説を壊す

夏目に関して日本人が共有しているのは〈漱石は文豪だ〉という伝説だけだろう。〈文豪〉とは「特に優れた作品を多く残した偉大な作家」（『類語例解辞典』616-49）のことで、その例として、日本人の作家では真っ先に漱石の名が挙がる。だから、〈漱石は文豪ではない〉という文は無意味に近い。「優れた作品」の具体例は、勿論、夏目作品ということだ。堂々巡り。

宗教的あるいは政治的信条などの相違を超えた日本の知識人たちのマナーのようなものがあるらしい。彼らは意味不明の作文を許容するばかりか、有難がりさえする。

> たとえば、近代最大の作家、夏目漱石を考えてみましょう。彼の初期の『吾輩は猫である』は、ドイツ・ローマン派の、Ｅ・Ｔ・Ａ・ホフマンの『牡猫ムルの人生観』からヒン

トを得て、真似したことは明らかですし、『虞美人草』の絢爛無比の文体と、女主人公の心理のソフィストケイトぶりは、明らかに当時の英国の流行作家、ジョージ・メレディスの『エゴイスト』を日本に移そうとしたのは間違いありません。

それが『彼岸過迄』の、伝奇趣味となると、例の『ジキル博士とハイド』などを書いたR・L・スティーブンスンの向うを張ったのでしょうし、一転して『道草』の平淡な日常の描写は、十九世紀はじめの女流作家、ジェイン・オースチンの『説得』などの細緻で、けれんのない筆致によって反省させられた結果でしょう。そして、最後の『明暗』の層々累々たる心理の構築は、ヘンリー・ジェイムズの難解さへの挑戦とも見られます。

このようにして、漱石は次つぎと、西洋近代文学の宝庫から、すぐれた手本を引き出し、日本の社会に適応して、西洋に負けない近代小説の建設につとめたのでした。

（中村真一郎『文学　この人生の愉(たの)しみ』「第12回　近代文学の世界性」）

「近代」は〈日本「近代」〉の略。「最大」の証拠は？　「夏目漱石を考えて」は意味不明。『吾輩は猫である』と『牡猫ムルの人生観』の関係は、決して「明らか」ではない。

自分ではこれ程の見識家はまたとあるまいと思うていたが、先達てカーテル・ムルと云(ママ)う見ず知らずの同族が突然大気焔(たいきえん)を揚げたので、一寸吃驚(ちょっとびっくり)した。

（夏目漱石『吾輩は猫である』十一）

中村の説が正しければ、そして、この語り手の猫が嘘をついていないとしたら、『吾輩は猫である』の作者は嘘をついていることになる。そういう理解でよろしいのかな？　『ホフマン全集』第7巻「作品解題」参照。

「絢爛」ではなく、冗漫。知識人を誑かすための美文もどき。「無比」かな、泉鏡花と比べても？　「ソフィストケイト」は呆れるばかり。

『虞美人草』の設定は『エゴイスト』から借りているのだろうが、ヒロインは『ヘッダ・ガブラー』（イプセン）のヘッダだ。「『エゴイスト』を日本に移そう」は意味不明。

「『彼岸過迄』の、伝奇趣味」には困惑。原典は『ジキル博士とハイド』じゃないんだよね。じゃあ、何？　ああ、もう、何が何だか。

『彼岸過迄』と『道草』の間の『こころ』が抜けている。なぜだろう。『こころ』をお涙頂戴と誤解しているからか。そうならそうと書けよ。とにかく、粗雑。

『道草』が「平淡な日常」だって？　本当に読んだの？　「『説得』など」の「など」は怪しい。『道草』から「けれん」は消えていない。「反省させられた結果」なんて、根拠は？

『道草』執筆以前、夏目はオースティンを読んでいなかったのか。あるいは、たまたま、読み返して……。いや、「反省させられ」たくて再読して……。もう、嫌だ。

『明暗』に関する「層々累々」という言葉を、私は初めて見た。〈層累＋死屍累々〉か。「心理の構築」は意味不明。「難解さへの挑戦」は意味不明。「とも見られます」で化けの皮が剥がれた。お疲れ様。そこらで一服してて ね。

『明暗』は、夏目の作品の中では、比較的平明だ。『こころ』よりも平明。『坊っちゃん』並みかな。ちなみに、『坊っちゃん』の清と『明暗』の清子と夏目夫人の鏡子は通底している。勿論、文芸的には無関係。

「適応して」は〈適応させて〉の間違いだろう。「負けない」というが、勝ったのか？　「負けない」の真意は〈勝てない〉だろう。「つとめた」から、どうなのか？

ところで、私は中村の小説を一つも読んでいない。今後も読むことはなかろう。

漱石文豪伝説は、このように、しばしば、というか、私の読んだ限り、全部、意味不明だった。とにかく、日本語になっていない。

私は、夏目を少しでも褒めている人の作文は、読まない。ページをめくって〈漱石〉という文字がちらりと見えたら、そこらを読んでみる。で、褒めてあったら、読まない。その本を読まないだけでなく、その著者の本のすべてを読まない。そう、決めている。余程の大家でもない限り、読まない。中村程度では読まない。〈漱石〉という文字は〈読む／読まない〉の判別に利用できるから、便利だ。

逆のことも言えそうだ。悪文家の多くが漱石文豪伝説の信者かもしれない。夏目の人生論とか何とかを好まなくても、夏目の文章を読んで嫌な感じがしない人は、悪文家だろう。

（～７３３０　知識人のマナー）

５　虚栄の隠蔽

あるテレビ局の解説委員みたいな人が〈漱石の言葉は意味不明〉といった不満を漏らした。すると、スタジオにいた著名な宗教学者が澄ました顔して、〈東大生なら、わかる〉というようなことを呟いた。

し～ん。

なぜ、東大生？　夏目は東大卒で、東大と言えば三四郎池で、『三四郎』は夏目が書いた小説らしい作品の第一作だからかな。

〈東大生にしかわからない〉と言ってほしかったな。〈偏差値七〇以上〉でもいい。〈ＩＱ一五〇以上〉でもいい。とにかく、〈漱石の言葉はエリートにしか理解できない〉といった定説があるのなら、私は一先ず安心できる。

あの学者は、なぜ、〈エリート意識〉という言葉を明示しなかったのか。

ことに日本においては、第二次世界大戦後、エリートといえば反民主主義、反平等主義のように受け取られ、語るのもはばかられる傾向さえあった。

（『日本大百科全書（ニッポニカ）』「エリート」）

誰に何と言われようと、エリートは自信満々のはずだ。そんな青年たちが夏目の陰湿な小説を読んで共鳴するとは思えない。共鳴するのは虎の威を借る狐だろう。虎が本物のエリートで、狐は自信のない点取り虫だ。ただし、他人からはエリートと思われたがっている。自信がなくて、虚栄しかない。

虚栄はかくも人間の心に錨（いかり）をおろしているので、兵士も、従卒も、料理人も、人足も、それぞれ自慢し、自分に感心してくれる人たちを得ようとする。そして哲学者たちでさえ、それをほしがるのである。また、それに反対して書いている人たちも、それを上手（じょうず）に書いたという誉れがほしいのである。彼らの書いたものを読む人たちは、それを読んだという誉れがほしいのだ。そして、これを書いている私だって、おそらくその欲望を持ち、これを読む人たちも、おそらく……

（ブレーズ・パスカル『パンセ』「第二章　神なき人間の惨めさ」一五〇）

私が批判しているのは、虚栄ではない。虚栄の隠蔽あるいは粉飾だ。

〈漱石構文〉は虚栄の隠蔽のために有効だ。だから、これを許容し、尊重し、さらには模倣する人が絶えないのだろう。

（～８１２０　誤読と虚栄（予定））

６　「東大話法」

なぜ、人は詭弁を弄するのか。勿論、自分が得をするためだが、金銭的な利益を求めているとは限らない。地位を守りたいのでもない。守りたいのは、立場だ。

この「立場」が現代では、かなり違った意味で使われています。試しに『大辞泉』をひいてみると、次のように説明されています。

たち - ば【立場】

１　人の立つ場所。立っている所。

２　その人の置かれている地位や境遇。また、面目。「苦しい―に追い込まれる」「負けたら―が悪い」

３　その状況から生じる考え方。観点。立脚点。「医者の―からの発言」「賛成の―をとる」「第三者の―」

（中略）

このような意味の派生はいつ、どのようにして生じたのでしょうか。

（安冨歩『原発機器と「東大話法」傍観者の論理　欺瞞の言語』）

この本の「第４章　「役」と「立場」の日本社会」　夏目漱石の「立場」」を、私の読者には、是非とも読んでもらいたい。

読んでもらったことにして、話を続ける。

安冨の解釈では、夏目は「立場」という言葉を複数の英単語の訳語として用いている。たとえば、〈standpoint, position, situation, stance〉など。つまり、〈ご飯論法〉だ。

「立場」は自分語だ。自分語を使うと、論敵を煙に巻くことができる。ところが、その結果、夏目は自分自身をも煙に巻いてしまった。自分が語ったり書いたりしていることの真意が、自分でも確認できなくなったのだ。

私は父からその後を聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、とうとうこう云った。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれは御前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬御前に会った時、ことによるともう三月か四月位なものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕合せか、今日までこうしている。折角丹精した息子が、自分の居なくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考を有っている御前から見たら、高が大学を卒業した位で、結構だ結構だと云われるのは余り面白くもないだろう。然しおれの方から見て御覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業は御前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」

私は一言もなかった。詫まる以上に恐縮して俯向いていた。

（夏目漱石『こころ』「中　両親と私」一）

この「私」は、変なおじさんＳを「先生」と呼ぶＰだ。

「父」の言う「結構」には、二つの意味がある。一つは、〈息子は「結構」だから褒めてやる〉という意味。もう一つは、〈息子が偉くて「結構」だから自分は「嬉しい」〉という意味。ただし、「父」は、まだ本心を明かしていないらしい。「結構」の意味の不足を補うために、父は「立場」という言葉を悪用する。

「父」の本心は、容易に想像できる。〈俺の息子は東大卒だぞ〉と威張れるからだ。Ｐは「父」の虚栄を嘲ることができなかった。〈大学に行かせてもらった代りに、「父」の犠牲になるのか？〉と言った疑問はばない。そうした疑問が浮んで、〈親孝行のために我慢しよう〉と考えたわけではない。疑問が浮ばないから、反対もできない。「私」は、真似事で「父」の「立場」を尊重してやり、親子の疎隔を自他に対して隠蔽した。

だが、めでたし、めでたし、とはならない。「父」の「病気」は再発し、死にかける。そんな「父」を置いて、Ｐは上京する。Ｓが「遺書」とされる長たらしい手紙を送ってきたからだ。ＳはＰの「父」が患っていることを知っていながら、「遺書」を送ってきた。ＰはＳに試されている。だが、『こころ』は、そういう話になっていない。作者は非常識だ。

二種の物語が、同時に、しかし、不充分に語られている。

１　「私」は「父」に対する孝養よりも「先生」に対する忠愛を重んじた。
２　「私」は父殺しの感情を自他に対して隠蔽するために、「先生」を利用した。

『こころ』の作者は、１を暗示しつつ、２を始末できなかった。だから、『こころ』は不可解な小説なのだ。

夏目のすべての小説は不可解だ。語り手や登場人物が「東大話法」的な、詭弁に類する言葉遣いを多用するためだ。勿論、作者が〈皆様、こんな語り手を信用しちゃ駄目だよ〉と暗示しているのではない。作者こそが「東大話法」に染まっているのだ。そのことは『硝子戸の中』のような随筆を読めば察知できる。

夏目の文体はおかしい。そう思わない人を、私は私の読者として想定しない。想定したら、イロハのイ、基本のキ、バナナのバから話を始めなければならなくなるからだ。もう、滅茶苦茶、仕事が増えて、混乱して、やがて自分も「漱石枕流」を実践してしまう。だから、私の読者も私の文章を疑わなければならない。謙遜ではない。私に謙遜なんて悠長なことをやっている余裕はない。

漱石は、明治という時代の展開に従って徐々に強まっていく、江戸時代とは異なった抑圧のシステムを見つめながら、その正体を「立場」として鋭く抉りだした、というように解釈するべきかもしれません。

しかし同時に漱石には、「立場」に拘束されることに嫌悪感を覚えながらも、それを守らねばならぬという義務感をも覚え、いつまでも果てることのない悩みの中で胃潰瘍になる、という側面があったようにも思います。もしそうだとすれば、それは現代日本人のあり方の、典型であり先駆であるようにも見えます。彼の作品がこれほどまで広く長く読まれ続けている理由は、あるいはこのあたりにあるのかもしれません。

（安冨歩『原発危機と「東大話法」　傍観者の論理　欺瞞の言語』）

「鋭く抉りだした」みたいなのは、文豪伝説。

「義務感」が「嫌悪感」に直結するとは思えない。「いつまでも果てることのない悩み」は、自分の立場③つまり「観点」などが原因ではなく、与えられた立場②つまり「面目」などが原因で生じるのだろう。「面目」に「拘束されること」を拒否できないから「悩み」が生じる。拒否できないのは、独自の「観点」を確立できないからだろう。つまり、基本的に

無責任だからだろう。虚栄の奴隷だ。
　ところで、近頃、〈京大論法〉というのも見かける。だが、大学の違いなんて、どうでもいい。虚飾の実態に違いはあっても、虚栄が動機であることに変りはない。
　大卒でなくても、〈〇〇話法〉を用いる人はいる。
　ところで、バナナのバ、知ってるよね？　ハバナのハでもいいけど。知らないのに知ってるつもりになりがちな人を、私は私の読者として想定しない。
（～１３２０　「中　両親と私」のあらすじ）

７　　二重構造

　自分語の使用は、本人の自由だ。しかし、〈ある人の自分語の意味を他人は理解すべきだ〉と強制されたら、困る。他人に理解できないのが自分語なのだからだ。

　日本語における翻訳の機能は、まず基本的にこの感じ中心の詞の言葉が担当している、と言うことができる。近代以後、それ以前の中国語受容文化から、西欧語受容文化へと変ったときも、媒体として利用されたのはやはり主として漢字であった。翻訳の要請にこたえて、漢字の新語が続々と作られた。概念、主体、客体、等である。また、従来使われていた漢字も、翻訳語としての新しい意味を担うようになった。たとえば今日、文化という言葉を見れば、多数の日本人は culture という横文字を思い浮かべるであろうし、表現とは expression のことだ、と思うことであろう。
　私たちが culture という言葉を聞いて、すぐにその意味が「分るはず」と思うのは、この言葉が文化という漢字に対応しているためなのである。たとえ、今、たまたまよくは分らなかったとしても、文化という文字で表されている以上、分らぬはずがない、と思う。だから、このような機能の漢字とは私たち日本人にとって普遍的な意味の言葉だ、と言うことができる。
（柳父章『日本語をどう書くか』「第二章　日本文の二重構造」）

　あるドラマで、〈文化と文明は違う〉と、知識人が喚いた。〈文化＝culture〉で〈文明＝civilization〉のつもりらしい。

　（１）　漢籍に見られる語だが、明治時代に「文明」とともに civilization の訳語として使用され、当初は「文明」とほぼ同じ意味であった。「文明」が「文明開化」という成語の流行によって明治時代初期から一般的に使用されていたのに対して、「文化」が定着したのは遅れて明治二〇年前後である。
　（２）　明治三〇年代後半になると、ドイツ哲学が日本社会に浸透し始め、それに伴い

「文化」はドイツ語の Kultur（英語の culture）の訳語へと転じた。それによって、次第に「文化」と「文明」の違いが強調されるようになった。大正時代には「文化」が多用され、「文明」の意味をも包括することとなった。

（『日本国語大辞典』「文化」）

〈カルチャー〉と〈シビリゼーション〉という和製洋語があって、英米人と通信するときに、日本的意味で culture や civilization を用いたら、誤解を招くかもしれない。

たとえば、〈彼の用いる文化という言葉はドイツ語の訳語かもしれない。私はドイツ語をよく知らないので、正確には理解できない。しかし、そのことを、知られるのは恥ずかしいから、タイパってことで自己欺瞞して、スルーするか〉なんて「病気」みたいな風潮が、明治から令和まで継続中なのかもしれない。和語、漢語、洋語が混在して収拾がつかない状況では、自分語の使用も大目に見られるのかもしれない。あるいは、気付かれない。

〈思い出せない原典と同様、思い出せない〈自分の物語〉が存在する〉といった妄想に夏目は囚われていたのではなかろうか。ただし、その自覚がない。だから、妄想を妄想として語ることができない。『夢十夜』の素材は夢だが、夏目のその他の作品の素材は、鮮明には思い出すことのできない、夢のような〈自分の物語〉なのではないか。

自分は凡(すべ)て文壇に濫用(らんよう)される空疎な流行語を藉(かり)て自分の商標としたくない。ただ自分らしいものが書きたいだけである。手腕が足りなくて自分以下のものができたり、衒気(げんき)があって自分以上を装う様なものが出来たりして、読者に済まない結果を齎(もたら)すのを恐れるだけである。

（夏目漱石『彼岸過迄(まで)に就て(ママ)』）

「凡(すべ)て」は宙に浮いている。「濫用(らんよう)」や「空疎」や「商標」は無視。

「ただ」と「だけ」は重複。「自分らしいもの」とは〈自分の物語〉を世界とする異本のことだ。「自分以下」も「自分以上」も意味不明。ウルトラジブン！　「読者」の像が不明。

「自分らしいものが書きたい」という文は、〈存在しない〈自分の物語〉の印象を表現したい〉という真相を露呈しかけたものだろう。

（～６３２０　長すぎる春）

８　『冬のソナタ』

なぜ、夏目の〈自分の物語〉は朦朧としているのだろう。理由は簡単だ。記憶喪失気味だからだ。実は、〈金之助の物語〉の語り手が朦朧としているからだ。〈自分の物語〉の語り手は、自分ではない。自分は主人公であって、語り手ではない。語り手は、通常、保護者だ。

夏目には、確かな保護者がいなかった。

俺たちは死産の児だ。もうだいぶ前から、生きた親たちから生れているわけではないし、それがますます自分で気に入りつつある。いよいよ親しみが増してきたわけだ。じきになんとかして理念から生まれる方法も考えつくことだろう。しかし、もうたくさんだ。もうこれ以上、《地下室から》書き続けたくはない……。

（ドストエフスキー『地下室の手記』「Ⅱ　ぼた雪に寄せて」）

〈自分の物語〉を語り尽すことは、生きている〈自分〉にはできない。

しかし私が話すことは、もはや事件の形骸でしかない。事件の当事者が問題なのであるが、その当事者は私ではない。私はその当事者と別個の存在になっている。事件の当事者は諸国を遍歴する。しかしいまの私はそれらの国々について、かつていちども行ったことがなかったのと同じように、もうじっさいには憶えていない。ときどき私は話をしているときに、地図を見るとでているアランフェスとか、カンタベリーとかいう美しい地名を口にすることがある。するとこれらの地名は、まったく新しい姿を私の脳裏に描きだす。それはいちども旅行したことのない人が本を読んで空想するのと同じである。言葉に基づいて夢想する。ただそれだけだ。

（サルトル『嘔吐』）

『こころ』の「遺書」は、Ｓの〈自分の物語〉の「残骸」だ。

わたしはクマタ機械工作というところで生れたそうです……
部品は一つに集められ……
できあがったといいます……
できあがったわたしは箱に入れられ……
もらわれていったそうです……
工場を出ると夕焼けがとてもきれいだったといいます……
もちろん、わたしはなに一つ覚えていません……

（楳図かずお『わたしは真悟』「１―無よりはじまる」）

語り手の「わたし」によって語られる「わたし」は〈真悟の物語〉の主人公だ。語り手の「わたし」は〈〈真悟の物語〉の「部品」を集め、そして、最終的には「もちろん」……。ネタバレになるから、中止。

ミニョン　（強い視線で）僕は誰ですか？

（キム・ウニ／ユン・ウギョン『冬のソナタ』「第 13 話　追憶」）

自分が誰なのか、自分は知らない。自分だけは知りえないのだ。
夏目は、ユジンのような人を探し続け、見出せないまま、死んだ。
（～７５２０　「この不可思議な私というもの」）

９　「漱石文化」から抜ける

私が批判したいのは、〈〇〇構文〉を怪しまない人の全員だ。彼らは、出版業界によって育てられた。

つまり今日の日本の文化人の世界では、而(しか)も高尚な文化人の世界では、高級常識から云うと、漱石文化が文化そのもののスタンダードになっているのである。科学でも芸術でも、時には宗教さえが（但(ただ)し邪教はいけないが）、このスタンダードに照(ママ)して評価される。之は現下の日本の、意外に強靭な、高級大常識なのである。このスタンダードは、高い文化水準を意味している。だがそれは高い思想水準と一つではない。又は、（文化という言葉をもっと将来のあるものとして使えば）高い技術水準を意味しているが、高い文化水準を意味していない、と云ってよい。
現在の日本に於けるアカデミシャニズム、及び云わばアカデミコ・ジャーナリズムの、最も優れた形態が殆(ほとん)ど総(すべ)てここに帰着するように思われる。アカデミシャニズムは、往々滑稽なもので風刺の対象にであるが、ここのアカデミシャニズムは、最も隙のない形のもので、決して滑稽視される心配のないものなである。にも拘らず世間からは色々と不満を持たれているものだ。世間はその不満をうまく云い表わせない。手強い相手なのだ。
（戸坂潤「現代に於ける漱石文化」）

真意は〈漱石礼賛は岩波への架橋〉だが、そんなことを暴露しても、どうにもならない。
「漱石文化」が日本の近代における主要で広範な文化だとすれば、日本人が「漱石文化」を批判するためには、自己批判が不可欠になる。ややこしい。

でこういう風に漱石文化の特色を転化して来ると、それはもはや漱石自身の文化的伝統とは必ずしも関係のない現象ともなる。要するに夫(それ)は、現代ブルジョワ日本の文化圏に於ける形式上の高水準、(ママ)というものを意味するにほかならない。そういう「文化」・「教養」・「気品」・「好み」(ママ)・を、そしてそれに対する忠実な秀才徒弟の賞揚を、意味するのだ。
（戸坂潤「現代に於ける漱石文化」）

戸坂の批判する「文化人」は〈夏目宗徒〉限定ではなかろう。思想的に夏目を批判する人も「漱石文化」に属すると、私は考える。

……「心(ママ)」「行人」「明暗」など、漱石晩年の作品に、私は、彼れ(ママ)の心の惑ひを見、暗さを見、悩みをこそ見るが、超脱した悟性の光り(ママ)が輝いてゐるとは思はない。

（正宗白鳥『夏目漱石論』）

「「心」「行人」「明暗」」と並べる理由は不明。執筆順なら、『行人』が先にくる。また、『こころ』と『明暗』の間の『道草』が省略されている。怪しい。「晩年」は『明暗』にしか当てはまらないはず。〈「作品に」～「見る」〉という構えはいただけない。「惑いを見」も「暗さを見」も「悩みをこそ見る」も意味不明。こういうものを「見る」からどうだと言いたいのか。〈一応認めるけど〉みたいなことか。だったら、卑怯。

正宗は、文豪伝説の信者から〈君には漱石先生の「超脱した悟性の光り」が見えないのさ〉と反論されたら、どのように応じたろう。

「超脱した悟性」は意味不明。

① 広義には、思考の能力。
② カントにおいては、感性に与えられる所与を認識へと構成する概念能力・判断能力で、理性と感性の中間にあり、科学的思考の主体。
③ ヘーゲルにおいては、弁証法的思考能力としての理性に対して、対象を固定的にとらえ、他との区別に固執する思考能力。

（『広辞苑』「悟性」）

〈悟性は超脱しない〉と、私は思う。だから、比喩としてすら、そんな「光り」はなく、それが「輝いて」いるはずもなく、その様子を思い描くことはできない。で、結局、「思はない」というのはナンセンス。正宗は、「超脱した悟性」を〈卓越した感性〉などといった、ちょろい意味で用いているのかもしれない。だったら、やっちゃったね。

同じ穴の貉。

何度も繰り返しているが、私の批判の対象は、宗教、性的志向、政治的信条などではない。文体だ。彼らが何者であれ、私が何者であれ、私は〈穴〉から抜けたい。考えるとき、漱石枕流型「文化人」を聞き手として想定したくない。やつらを無視すること、徹底的に。

簡単なことではない。

抜けるために夏目作品を壊そう。片っ端から壊す。

（～１１３０　わかったつもり
（～１１２０　読むと貧弱になる『こころ』）

１０　誤読から異本へ

〈○○構文〉を使う人は、そもそも読解力が劣っているのではなかろうか。他人の文章を読んで腑に落ちなくても、理解できたことにしてしまう。そんな雑な読み方が習慣になっているのだろう。だから、自分の作文を校正できない。多少、不安を覚えても〈人々は自分と同様の雑な受け取り方をしてくれる〉と、高を括っているのではなかろうか。

大変に虚栄心に富んだ女房を持った腰弁がありました。ある時大臣の夜会か何かの招待状を、ある手蔓で貰いました。女房を連れて行ったらさぞ喜ぶだろうと思いのほか、細君はなかなか強硬な態度で、着物がこうだの、簪がこうだのと駄々を捏ねます。せっかくの事だから亭主も無理な工面をして一々奥さんの御意に召すように取り計います。それで御同伴になるかと云うと、まだ強硬に構えています。最後に金剛石とかルビーとか何か宝石を身に着けなければ夜会へは出ませんよと断然申します。さすがの御亭主もこれには辟易致しましたが、ついに一計を案じて、朋友の細君に、こういう飾りいっさいの品々を所持しているものがあるのを幸い、ただ一晩だけと云うので、大切な金剛石の首輪をかり受けて、急の間を合わせます。ところが細君は恐悦の余り、夜会の当夜、踊ったり跳ねたり、飛んだり、笑ったり、したあげくの果、とうとう貴重な借物をどこかへ振り落してしまいました。両人は蒼くなって、あまり跳ね過ぎたなと勘づいたが、これよりは以後跳方を倹約しても金剛石が出る訳でもないので、やむを得ず夫婦相談の結果、無理算段の借金をした上、巴里中かけ廻ってようやく、借用品と一対とも見違えられる首飾を手に入れて、時を違えず先方へ、何知らぬ顔で返却して、その場は無事に済ましました。が借金はなかなか済みません。借りたものは巴里だって返す習慣なのだから、いかな見え坊の細君もここに至って翻然節を折って、台所へ自身出張して、飯も焚いたり、水仕事もしたり、霜焼をこしらえたり、馬鈴薯を食ったりして、何年かの後ようやく負債だけは皆済したが、同時に下女から発達した奥様のように、妙な顔と、妙な手と、卑しい服装の所有者となり果てました。話はもう一段で済みます。

（夏目漱石「文芸の哲学的基礎」）

これは『首飾り』（モーパッサン）の粗筋だが、夏目は誤読している。

「何知らぬ顔で返却して、その場は無事に済ましました」という部分に着目しよう。「無事」は〈盗みの隠蔽に成功〉ということだ。そのことが、夏目には了解できていない。

ロワイゼル夫人が首飾りを返しに行くと、フォレスティエ夫人はむっとしたようにこう言った。

「もっと早く返すべきよ。わたしだって使うかもしれないんだから」

けれども箱のふたはあけなかったので、ロワゼル夫人はほっとした。中身がすり替わっていることに気づいたら、なんと言われただろう？　泥棒呼ばわりされたかもしれないわ。

（モーパッサン『首飾り』）

夏目はこの部分を読み落としている。

「借用品と一対とも見違えられる首飾」でも、それを見た「朋友の細君」は見違えないかもしれない。返してもらったときには気づかなくても、後で気づくかもしれない。

ある日この細君が例のごとく笊か何かを提げて、西洋の豆腐でも買うつもりで表へ出ると、ふと先年金剛石を拝借した婦人に出逢いました。先方は立派な奥様で、当方は年期の明けた模範下女よろしくと云う有様だから、挨拶をするのも、ちょっと面はゆげに見えたんでしょうが、思い切って、おやまあ御珍しい事とか何とが話かけて見ると案のごとく、先方では、もうとくの昔に忘れています。下女に近付はないはずだがと云う風に構えていたところを、しょげ返りもせず、実はこれこれで、あなたの金剛石を弁償するため、こんな無理をして、その無理が祟って、今でもこの通りだと、逐一述べ立てると先方の女は笑いながら、あの金剛石は練物ですよと云ったそうです。それでおしまいです。これは例のモーパッサン氏の作であります。最後の一句は大に振ったもので、定めてモーパッサン氏の大得意なところと思われます。軽薄な巴里の社会の真相はさもこうあるだろう穿ち得て妙だと手を拍ちたくなるかも知れません。そこがこの作の理想のあるところで、そこがこの作の不愉快なところであります。

（夏目漱石「文芸の哲学的基礎」）

「軽薄な巴里の社会」の習慣では、本物は仕舞っておいて、見せびらかすのは「練物」と決まっていたのかもしれない。そして、そのことを「両人」は知らなかったのかもしれない。こうした想像が夏目にはできない。

よくせきの場合だから細君が虚栄心を折って、田舎育ちの山出し女とまで成り下がって、何年の間か苦心の末、身に釣り合わぬ借金を綺麗に返したのは立派な行動であるからして、もしモーパッサン氏に一点の道義的同情があるならば、少なくともこの細君の心行きを活かしてやらなければすまない訳でありましょう。ところが奥さんのせっかくの丹精がいっこう活きておりません。積極的にこう云うと言い過ぎるかも知れぬけれども、暗に人から瞞されて、働かないでもすんだところを、無理に馬鹿気た働きをした事になっているから、奥さんの実着な勤勉は、精神的にも、物質的にも何らの報酬をモーパッサン氏もしくは読者から得る事ができないようになってしまいます。同情を表してやりたくて

も馬鹿気ているから、表されないのです。それと云(ママ)うのは最後の一句があって、作者が妙に穿った軽薄な落ちを作ったからであります。

（夏目漱石「文芸の哲学的基礎」）

「虚栄心を折って」という物語なら「細君」は最初から「拝借した婦人」に真実を語るべきだ。そして、謝罪する。隠蔽が「立派な行動」か？　「道義的同情」なんか、とんでもない。「暗(あん)に人から瞞(だま)されて」となると、逆恨み。「妙に穿った軽薄な落ち」で済んだから、よかったんだよ。「金剛石」が本物で、しかも「先方」にとって金に変えられない特別な品だったとしたら、どうなっていたろう。

この一句のために、モーパッサン氏は徳義心に富める天下の読者をして、適当な目的物に同情を表す事ができないようにしてしまいました。同情を表すべき善行をかきながら、同情を表してはならぬと禁じたのがこの作であります。いくら真相を穿つにしても、善の理想をこう害しては、私には賛成できません。

（夏目漱石「文芸の哲学的基礎」）

ロワゼル夫人は虚栄のために首飾りを借用し、虚栄のために詐欺を働き、虚栄のために苦労を重ね、虚栄のために告白をした。だから、もし、「この一句」がなかったら、彼女は死ぬまで「虚栄心」の奴隷でいたことだろう。

夏目は違法な「徳義心」を賛美しているわけではない。隠蔽の違法性に気づいていないのだ。なぜ気づかないのか。この「徳義心」の真意は〈虚栄心の隠蔽〉だからだ。彼がロワイゼル夫人に同情するのは、彼自身が「虚栄心」の隠蔽に命を懸けていたからだ。

今までに書かれたあらゆる小説のなかで最も残酷な物語が「首かざり」(「モーパッサン短編集Ⅱ」）であろう。この夫婦の人生こそ考え得るかぎり惨めの極みである。生涯の苦労がすべて無駄であったと悟らされた時には如何なる救いも見出せぬではないか。

（谷沢栄一『人間通』「空しさ」）

谷沢は夏目と同種の誤読をしている。なぜ、誤読をするのか。谷沢も「見え坊」だからだ。谷沢流「人間通」の正体は「見え坊」の半可通だ。

『首飾り』程度の小品が「最も残酷な物語」だなんて、とんでもない。彼がこういう大袈裟な言葉を用いるのは、後ろめたさを隠蔽するためだ。彼が「文芸の哲学亭基礎」を読んでいないとは考えられない。読んでいたとすれば、彼はここで暗に夏目批判をやっていることになる。では、なぜ、夏目と同種の誤読をしておきながら、夏目とは正反対の評価を下すのだろう。答えは簡単だ。モーパッサンを夏目から守りたいからだ。世界的作家を守らないと、自分の「立場」が守れないからだ。では、彼は文豪伝説の信者ではないのか。信者だろう。

だから、彼は二股を掛けていることになる。
誤読をしても二股を掛けなければ、次のような解釈が生まれる。

この作品はまた、夏目漱石が批判していることでも知られています。主人公の十年にわたる勤勉な努力が、最後の一行で無意味になってしまい、共感できないというのです。（「文芸の哲学的基礎」）。けれども、私が読んだ感想は少々違うものでした。たしかに主人公にはつらい年月でしたが、手の届かない、浮ついた夢を追って不満だらけだったころよりも、地に足ついた堅実な暮らしを送るようになったのは、これからの人生にとってむしろ幸いだったのではないでしょうか。

（平岡敦『モーパッサン　首飾り』「訳者あとがき」）

これは解釈というか、まあ、異本だな。
誤読の結果、異本を創作するのは、決して悪いことではない。先人の作品に不満を覚えると創作意欲が湧いてくるということはある。
夏目は『首飾り』の異本を構想できなかった。彼の想像力は翻訳家のそれより劣るのだ。
蛇足だが、彼は翻訳もやっていない。
夏目や谷沢のような誤読の名人を、私は私の読者として想定しない。その理由は、すでに書いた。こっちまで混乱してしまうからだ。
夏目作品の読者になるためには、夏目的誤読をする必要がある。それができないときは異本を拵える。
（～８１１０　『首飾り』（予定））

１１　臭い『草枕』

夏目の文章で最も知られているのは『草枕』の次の四つの文だろう。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

（夏目漱石『草枕』一）

この四つの文は、意味不明だ。
もう少し穏やかな言い方をしよう。これらの文の意味を、日本人は共有していない。その証拠に、これらの文が辞書に載っている。古文でもないのに辞書に載っているのは、難解だからだ。
特に、「情」の文が難しい。「掉させば」が困る。

「掉さす」という語が本来は〈舟を流れと同じ方向に進める〉という意味であったのが、いまは〈流れに逆行ことわする〉という意味に使われていることは広く知られていて、国語辞典も『新明解国語辞典』と『三省堂国語辞典』はいちおう「誤って」とはしながらも記載している。『新潮現代国語辞典』では「誤って」とも書かず、単に「（近時の用法）流れに逆らう」となっている。この意味では漱石の『草枕』の冒頭の「情に棹させば流される」が正しく読めないではないかと息巻いてみても、時代の流れに抗するのは難しい。

（国広哲弥『日本語誤用・慣用小辞典』「第一部　意味の誤用」「棹さす」）

『草枕』が「正しく読めない」から「時代の流れ」が生じたのではないか。

「他人の感情を気遣っていると、自分の足元をすくわれる」（『大辞泉』）

「人情に従えばその場の状況に流されて足もとをすくわれる」（『明鏡　ことわざ成句使い方辞典』）

「感情に走って世間を渡れば思わぬところに行ってしまう」（『故事ことわざ・慣用句辞典』）

「人情だけを大切に考えると他人の気持ちに引きずられてしまう」（『成語林』）

「感情に身をゆだねると物事が流されてしまう」（『会話・スピーチで使える！　場面別ことわざ・名言・四字熟語』「智に働けば角が立つ」）

『大辞泉』の「他人」は、どこから現れたのか。「足元をすくわれる」は、よくある間違い。〈「気遣っていると」～「すくわれる」〉は無意味。ひどい辞書だ。

『明鏡ことわざ』は日本語になっていない。

『故事ことわざ』の「感情に走って」が正しい。ただし、「思わぬところ」は曖昧。「思わぬ良い結果となった」（『自然科学系和英大辞典』「思わぬ」）という例がある。

『成語林』の「人情だけ」の「だけ」は変。この「他人」も、『大辞泉』と同様の誤り。

『会話・スピーチで』の「身をゆだねる」はいいが、「物事が流されしまう」が意味不明。

『故事ことわざ』と『会話・スピーチで』以外の辞書は、まったくの見当違いだ。なぜなら、「情」は、「智」や「意地」と同じく、当人のものと解釈すべきだからだ。

「情」だけを他人のものとして解釈するのは、形式美を無視している。無視してもいいが、無視する理由が不明だ。

四つの文は次のように、四字熟語に置き換えられる。

自画自賛　智に働けば角が立つ。　〈屁理屈〉
自暴自棄　情に棹させば流される。　〈やけくそ〉

自縄自縛　意地を通せば窮屈だ。　〈痩せ我慢〉
自業自得　とかくに人の世は住みにくい。　〈いじけ〉

四つに共通するのは自作自演だろう。足りないのは、自問自答と自由自在だろう。自重自愛が隠蔽されているのかもしれない。

知情意は心を三分割したものだ。ばらけたままなら、しくじるのは当然。

「「智・情・意」の三者が各々権衡を保ち、平等に発達したものが完全の常識だろう」（渋沢栄一『論語と算盤』「常識と習慣」「常識とは如何なるものか」）と考えるのが常識だろう。

文豪漱石には「常識」が足りない。まず、「智」がまっとうに働かないようだ。

夏目の作文を読んで意味不明と思わない人には、「智」が足りない。そんな人を、私は私の読者として想定しない。

（～４３００　臭い『草枕』）

（終）